様式３

会　議　記　録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	第２回近江八幡市家庭教育推進協議会		
開催日時	令和８年　８月２７日（木）１０：００～１１：３０		
開催場所	近江八幡市市役所　２階議室ＦＧ		
出席者 ※会長等◎ 副会長等〇	＜委員＞ ◎上村委員　〇北川委員　日岡委員　富岡委員　永峰委員 吉積委員　森　委員　伊丹委員　白嵜委員　谷口卓委員 杉　委員　谷口茂樹委員　表　委員　澁谷委員 ＜事務局＞ 安田教育長　包吉次長　万野課長補佐　富永指導主事 古本指導主事　三橋家庭教育支援コーディネーター 山本家庭教育支援コーディネーター		
次回開催予定日	令和８年１１月１３日（金）１０：００～１１：３０		
問い合わせ先	所属名：近江八幡市教育委員会事務局生涯学習課 担当者名：冨永　祐加 電話番号：０７４８－３６－５５３３ E-mail：045000@city.omihachiman.lg.jp		
会議記録	発言記録　・　要約	要約した理由	発言内容が整理され、記録として残すのに適しているため
事務局	１　開会 ２　教育長あいさつ ３　会長挨拶 ４　報告（事務局より） ・近江八幡市における家庭教育支援の取り組み状況について ・生涯学習課主催の市子育てサロンについて ・親子の対話に関するアンケート結果について		
会　長	それでは、まず令和８年度７月までの近江八幡市家庭教育支援基盤構築事業に関連しての報告を事務局よりお願いする。		
事務局	それでは資料の２ページ、３ページをご覧いただきたい。 ３ページの資料１に各小学校の家庭教育支援員の７月までの活動内容の内訳を掲載している。１学期は９５時間が学習講座の運営に充てられており、校長を交えて保護者同士がつながる場を作ったり、懇談の始めや終わりに家庭教育支援員と相談できる場を作ったりするなど、４校が子育てサロンを開催した。 また、５５時間は相談対応に充てられている。学校だけでなく保護		

	者宅や地域のお寺、コミュニティセンターなどでも相談に当たるなど、アウトリーチ型の支援にもつながっている。また就学前にも拡充した８名の相談員も、７月に園・所、センターとつながり、どのように保護者とつながるか、保護者の学びの場をいつ設定するかなどについて計画を立てて活動を始めているところである。 　続いて資料２の生涯学習課が開催した子育てサロンの一覧をご覧いただきたい。１学期は６月に小林美保子先生をお招きして、「親だって悩んで当たり前、子どもの今を一緒に考えましょう」と題し、参加者の子育ての悩みに対して小林先生にアドバイスをいただくという形式のサロンを開催した。参加者は保護者１０名、家庭教育支援員が２名であった。２学期は子育てサロンを２回開催する予定をしている。３学期にも２回開催を予定している。２学期の第１回は会長である上村先生にもご協力をいただき、子どものＳＯＳに関するサロンを開催する計画をしている。 　続いて４ページ目をご覧いただきたい。こちらは市内の小学校４年生から中学校３年生の全ての子どもたちを対象とした、家庭での親子の対話に関するアンケートの結果である。そのうち１０番の「おうちの人と話しますか」、１１番の「おうちの人はあなたの話を聞いてくれますか」、１２番の「おうちの人はあなたの気持ちをわかってくれていると思いますか」という質問に対して、多くの子どもたちが家庭での会話そのものが確保されているというふうに感じているという結果が出ている。 　ただ、先ほど教育長も申し上げたように様々な状況の変化の中で共働き世帯が増えたり、子どもたちが忙しくなったりしているにも関わらず、これだけの子どもたちがおうちで話をしている、また聞いてもらっていると考えているという結果を数字通りにとらえていいかどうかについて、私たちはよく考えていかなければならないと思っている。また、１２番の「あなたの気持ちをわかってくれていると思いますか。」については、１０番、１１番の項目に比べて否定的な回答が増えていることが見て取れる。家庭内での会話が表面的な会話だけにとどまって、わかってもらえていないというふうに感じている子どもも一定数いるのではないかなと感じている。このことから親子の対話の質を高めていく工夫も必要ではないかなととらえている。 　最後に、資料にはないが、動画作成について周知をさせていただく。全国学力学習状況調査によると、本市の子どもたちのＳＮＳ等を利用する時間は非常に多くなっているようである。より多くの保護者に子どもたちのＳＮＳの利用について考えていただくきっかけを作るために、動画を作って啓発していこうと考えている。９月補正で予算を議会に提出しているので、議会を通れば動画を通じて保護者への啓発もしていきたいと思っている。事務局からは以上である。
会　長	今の事務局の報告で意見はないか。質問でも結構である。 ４　情報提供と意見交流 「家庭内でのコミュニケーションを支えるために、それぞれの立場でできる取組」
会　長	質問、意見がないようなので、これまでの報告も含めて意見の交流を図っていきたい。本日は家庭内でのコミュニケーションの支え方について、それぞれの立場で考えていきたい。 　今ほどの報告のデータ上での状況は、見えている範囲の小中学生の

	実態通りにはなっていない。聞いてもらえてないと答えている３割の大きさもきちんと考えていかないといけないし。中学生では、親は話をしているつもりでも子どもはわかってもらえていないと感じている。親子ともに忙しい中で、コミュニケーションの質的な部分の評価を含めて検討していくことが必要ではないかと考える。会話と対話が違うように、発信するだけのアウトプットではなく、相手側にどうインプットされたかとか、それがどういう効果があるのかというインパクトについても考えていく機会になればと思っている。今日は様々な立場からご参加いただいているので、子どもに一番近い立場、また親に一番近い立場での皆さまからご意見を賜れたらなと思う。 　まず、家庭教育に長年ご尽力いただいている委員にお願いする。
委　員	親は子どもにいろんなことを話して、子どもが黙って聞いてくれているから、それでわかってもらってるという一方的な取り方では、子どもは、親に何を言ってもダメだろうと思ってしまう。そのようなことを私どもの食堂に来る子どもたちは言う。親に言おうと思っても言えない雰囲気があると子どもが感じている。私も自分の子育てのなかで、わかっているつもりで子どもに言っていたのが、実は子どもはわかっていなかったということを反省しており、今の親にはその話を伝えるが、とにかく時間がないから、親は子どもに、これをして、これはあかんとだけ言う。お風呂も小学校一年になったので自分で入らせていると言う親には、たとえ１０分でも１５分でも一緒に入って、「今日は何があった？」と子どもと話するのが一番いいのではないかという話をする。子どもと話をするために、親は一緒にお風呂に入る時間をせめてつくってほしいと思い、話をしている。母親も父親も、子どもがある程度の年齢になると一緒にお風呂に入らないご家庭が多いように感じている。お風呂ぐらいは一緒にゆっくりと入る。それが一番大事ではないかと考えているので、これからそういうことを小学校でも声を上げていきたいと思っている。
会　長	最近の子育て事情もあるので、次に、そういった今の令和の子育てを、ちょっと現実的なことをお話しいただきたい
副会長	富岡委員がおっしゃった話す時間のことだが、就学前の母親も仕事をされるようになり、午後７時半ぐらいまで子どもを保育所に預けている。それから晩ご飯の支度をして食べさせて寝かせてと本当に忙しい。私は、幼稚園に勤めている。保護者には、忙しい中でも子どもが寝る前に絵本を１冊読むと、たとえ園の話ができなくても絵本の話で会話ができるから、絵本の読み聞かせは大事だと一生懸命に勧めている。しかし、その時間をつくるのも保護者は難しくなってきているのが現実のところで、夕飯の支度をしている間に子どもと話をしなくてもいいようにゲームをさせたり、YouTube を見せたりすることで時間を確保し必要なことをしている保護者も結構おられるように感じている。だから今、話にあったお風呂に一緒に入るという共通の時間が大事だと思う。園の方でも、赤ちゃん返りが増えたとか、トイレの回数が頻繁になってきているという子どもの保護者には、寝る時間はどうしてるのかということを聞いたりする。すると子どもと一緒に寝ている保護者は子どもの年齢が上がるに従って少なくなってきている。一緒に寝るだけで肌のぬくもりだけでも感じると、子どもたちは安心して次の日に登園する元気をもらうという話をする。そのことで保護者と共有できたりはするが、今のこの忙しい時代の中で、子どもと向き

	合う時間をどう捻出するかを保護者自身も本当にすごく悩んでると思う。そこにどのようにアプローチすればいいかとそれぞれの園、所では考えている。
会　長	では、小学校と中学校の先生方にも、今の子育て事情とか保護者とかを子どもたちの様子と関連してご意見をいただきたい。
委　員	家庭が見えにくくなってきていることを実感している。私達は、保護者とつながる、家庭とつながることを一番大事にして生徒指導などに取り組んでいる。コロナ禍が一つの境目であったかと思うが、保護者はクレームなどの場合は学校に来られるが、こちらからの発信はなかなか受けてもらえない状況がある。生徒指導重点校である本校であっても家庭とのつながりが希薄になってきている。先生方には足しげく家庭訪問をしてほしいと伝えるが、家庭訪問を断られることはやっぱり多くなってきている。定例の家庭訪問ですら、もううちは要らない、家の中を見てもらいたくないとかで、家庭との関わりが難しくなってきたというのが実感であり、今回のテーマを考えると、学校では打つ手がなくなってきたなと思っているのが現状である。 その中でも私が先生方にお願いしているのは、一つは、上村先生がおっしゃったように、褒める機会をどこで持つかということである。学校では褒める場合と指導する場合があり、電話連絡だけでなく家庭訪問に行って「足」で稼ぐ連絡を行い、家庭とのつながりを大事にしてほしいということである。もう一つは、子どもの通知表に所見を書かない学校が増えているが、本校は私がいる限りは書いてほしいとお願いしている。子どもの課題や注文は口頭で言えばいいから、所見の中で子どもの褒めるべきところをきちんと書いてやってほしいとお願いしている。保護者は成績については必ず見るから、数字だけでなく、所見で先生が１学期をどう評価したかというのを読んでもらえば、家でもその話になるだろう、書かなければ家でそんな話にはならないと言って、実践を続けているところである。 さらに、保護者と会う機会は少なくなってきているので、入学式の後に、校長の私自身が、スマホの使用は２時間までとか、リビングで使うとか、そういう約束事を子どもと必ずしてほしい。ＳＮＳはトラブルの根本原因になるので、親も責任を取ってほしいということを、言葉を選びながら伝えている。
会　長	では、小学校はいかがか。
委　員	前任校から今の沖島小にかけて、私が校長として悩んでることをお話させてもらいたい。どの学校にも不登校傾向の子どもがいて、その保護者は日々悩んでおられる。そういう保護者からの相談を受けるが、なかなかうまく支援できないということである。どの保護者も、学校に行きにくい、教室に入りにくい子どもとの関係に悩んでいる。ある保護者は、子どもの言うことをどこまで受け入れていいのかその境界線がわからなくて悩んでいる。それはおうちによっても、子どもによってもいろいろだとは思うが、スパッとした答えをこちらも言えないので心苦しい思いをしている。そういう保護者は学校にも相談に行かれるし、いろんな知り合いの方とか関係機関とかにもいろいろ相談に行かれて、それぞれの立場のそれぞれの方からアドバイスを受けている。行く先々で保護者は、専門家とか学校とかの言う言葉になびかれるまま、結局、保護者自身がどのようにしたいのかというのが定

	まらないまま子どもに対応している。 　私は、保護者が、私は親として子どもをこういうふうに育てたいから、こういうふうに育てていくんだっていうことをしっかり持つことが大事ではないか思う。それに対して支援をしていき、子どもの一生に責任を持つ保護者を支えていく。保護者の子育ての信念とか、子育ての方針をしっかりと理解し、そこにどう力添えしていくかというのが大事だと思っている。
会　長	園とそして小学校と中学校と子どもに直接関わってくださっている機関からご意見をいただいたが、フリースクールとワールドアミーゴからも来ていただいてるので、地域から見た子育て事情も含めてお話をいただきたい。
委　員	私のところには、小学生から３８歳までの方が来ている。経歴としては不登校だったり、引きこもりだったり、全日制高校に通うことが難しく、通信制に転校した方とかがいる。その保護者と話をする親の会というのも同時に開催している。いろんな機関を回ってたどり着く保護者が大変多く、保護者自身は自分が持っている答えをもらえるところが好きなので、そこにたどり着くという状況があり、当方に来るのはそういう保護者が多い。、私達のところに来ているほとんどの方が、当事者もしくは当事者の家族なので、来た保護者はそれだけで安心をする。その安心を得ることでお話を深く聞いていくことが可能であり、もっと深いお話ができると思っている。 　私自身はふだん学童にいて、夏休みなので学童は朝７時半から夜の８時まで開いている。平日は、保護者は朝８時には放り込むように子どもを連れてきて、迎えは遅い方だと７時、７時半になり、その子どもたちは、土日は習い事をしている状態である。子どもに「いつお母さんたちと喋るの」と聞くと、「車の中」と答えて、送迎の車の中だけが親子の会話の場所だと言える。また習い事もバイオリンだったり、ブレイクダンスだったりと多様化している。大人の時間に合わせて開所しているところも多く、学童が終わってから習い事に行く。７時に行って９時まで習い事してる子どもも中にはいて、学童に来ている間、寝ている子どももいる。なので生活していく中で必要なことがあまり伝えられてないというのが見られる。学童ではお昼を一緒に食べるが、箸の持ち方から教えていかなければいけない状況にある。食事中にスマホを見ながら食べようとする子どももいて、初めて来る子どもには、そういうことはいけないんだよ、なぜ見たらダメなのかというのを伝えながら、学童はそこまでしなくてはいけないのかと疑問に思いながらやっているのが正直なところである。 　不登校の居場所に関しては、先日、高校生から大学生の不登校の経験者と現在その状態にある子どもたちにアンケートをとった。居場所について聞いたアンケートでは、自分たちが居場所を利用してから周りの人に変化があったかという質問について、ほとんどの者が変化があったと答えていた。自分たちが安心で安全な場所で十分に過ごすとこができて、その子の自己肯定感が安定してくることで、周りの支えや応援に気づく。私は、子どもたちは今、周りに支えてくれている、応援してくれている者がいることに気づけない状況にあるのではないかと思っていたが、本人たちが安心することで、そういうことに気づけるようになったという回答があったので、支えてくれているし応援してくれいる人がいることに気付くには、まず安心で安全なところで十分に過ごせているかいうことが一つにあるのかなと、そのアンケー

	トから思った。自己肯定感についても、できたと褒めてもらったとかいうような比較的揺らせやすいものと、揺らせることが難しい、自分自身の価値というか、今のままでいいやとかいうものを動かしていくには、まず、本人にとって安心安全なところで、揺らして、動きやすい方を揺らしてからでないと動かないんだなと、そのアンケートから、まとまってはいないが、そのように自分なりに考察した。目の前の方を、とにかく大事にするというのがすごく大事だと思っている。
会　長	アンケート結果を通じて現場の声をいただいたが、私が今日、持ってきた資料、よく講演で喋る内容と相関すると思ったので、併せて解説もしてみたい。今、子どもの安心安全が整うと、周りで支援されていることに気づくという声があったというお話を伺った。 私の資料の中段ぐらいに、安心と挑戦という絵がある。愛着理論の話だが、よく学校現場で先生から愛着に課題があるとか、愛着障害とか言う言葉を聞くと、それは愛がないというふうに伝わってくる。母のラブとかハートとか、それは英語で言うとアタッチメントで絆のことだが、それは、実はこの図の左側の「安心」と「挑戦」、すなわち頑張るということにあたる。例えば発達課題のある方で言えば、折り合いをつけるとか、嫌だけどするとか、お母さんが帰ってくるまで一人の時間になるけど頑張るというのが「挑戦」にあたる。安全の基地にあたるのが「安心」側の方で、信頼できる人であったり、場であったり、空間であったり、関係があってチャージされることで、子どもたちや大人も一緒で、「人」が頑張る根拠になる。組織の中で頑張れなくて悩んでいる人に対しては、頑張りなさいばっかりの、「挑戦」ばっかり言って、「ようやったね」っていう「安心」が少ないと思う。先ほどお話があった安全基地の機能がこの図の左で、そういう安心安全があったらいろんなことを頑張ることができて、頑張ったことに対して、よくやったねとか、人の役に立ったねとか、それが形ある承認の仕方だと思う。もう一つ私が申し上げたかったのは、３番のコミュニケーションの「質」というところで、比較の承認ではなく、子供の実存的幸福で、これはあなたが存在していることそのものが尊いというメッセージである。 １００点を取ったから、あなたが素晴らしいんじゃなくて、１００点を取るだけの努力を今までしたあなたが素晴らしい、というプロセスを承認する。しかし、結果だけを承認するようなことばかりで、結果が明らかに出ないときや、頑張ったけれども結果が残念だったときに努力したプロセスを承認してもらえなければ、人は頑張ることに対する尊さをなかなか感じとれない。特に、資料にも書いているように、問題を起こす子どもというのは、どうして怒られることばかりするのか。先ほどの事務局の報告の中の７割関わってもらえていると回答した以外の３割の子どもたちは、おそらくこの怒られるばかりのコミュニケーションパターンしか得ていない。なぜかというと、先ほどからお話があったように、親は忙しい。しかし昔みたいに、忙しいときにちょっと子どもを見てと頼める親族が近所にいない。実の親も嫁ぎ先の親も６５歳までならみんな働いている。だから学童に預ける。親はオペレーションの自由と引き換えに、いろいろとタイトなスケジュールで、ハイスペック、フルスペックで頑張っている。そのため、子どもに関わる時間的余裕がないので、ちょっとした時間でも、高学歴、そしてハイスペック、フルスペックの能力を子どもに身につけてほしいと思い、習い事をさせる。だから子どもたちも忙しい。けれどもその土日の習い事だけは、野球だったり、何とかクラブであった

	り、親はもう全身全霊で応援してくれる。月曜日から金曜日までは、家へ帰ってから寝るまでの時間、「〇〇しい」とか「どうなってるんや」という、ちょっとアグレッシブな否定メッセージの多い会話がリビングに横行し、「今日はどうやった？」とか「これこれはどうや？」とか、そういう柔和なコミュニケーションにはならない。「ああしなさい」、「どうとかこうとか、いい加減にしなさい」っていうストローク、資料の真ん中で書いているネガティブな青色のストロークとピンク色とノーストロークばかりになる。子どもはどうして大人がイラッとするような行動をするかというと、怒られるときしか親に関わってもらえない。「いい加減にしなさい」って言うときはみんな秒で言える。しかし、「よくやったね」っていうのは秒ではできない。褒めることが苦手な人は、子どもが良い行動したときに嫌味で褒めてしまい、さらに「それができるなら、何でこれができんのや」と言って、もう１回叱ってしまったりもするので、なかなかこの子どもが願っているポジティブなストロークを素直に言えない。 　これは大人も一緒である。自己肯定感の高い人は素直に人を認めるが、自己肯定感の低い人は、褒めてもちょっと嫌味だったり、ちょっと期待値が高かったりしてしまう。自己肯定感は子どもに関わるだけの問題ではなく、人はそういうものなのかなと思う。先ほどの話の続きだが、時間が限られてるからこそ、接点が少ないからこそ、今日の演題にもあった「質」の問題になると思う。先ほど不登校の親のお話にもあったが、接点が長くても「質」に困られている。不登校の親は、子どもとの時間はたくさんあっても、いい関わりができなければ子どもにはプレッシャーになってしまい、地雷を踏んでしまったり、受け入れてもらえてなかったりする。ネガティブなストロークが子どもには恐怖とか圧とかになってしまう。そういうことではなく「駄目なことは駄目」としっかり言えばいいだけである。そこが「怒る」の人と「叱る」の人は違う。「怒る」は感情の爆発。「叱る」は、きちんと冷静に何がダメで、どうしたら成功するかということを教えている。こういうことを家庭教育の場で話をするが、その場に来る人は過剰にわかっていて、過剰に一言一句に頭に入る人なので、不安が高くなるとよく来る。 　アウトリーチで大事なことは、今言ったようなことを、家庭教育支援の方や、こちらにいらっしゃる皆さまが、Ａ家にはＡ家、Ｂ家にはＢ家、Ｃ家はＣ家というふうに、家庭の実態と親の背景に合わせて翻訳して言うことだと思う。子どもはやっぱり認めてほしい、かまってほしい。いいことをしたら誰だってかまいやすいが、先ほどお話に出てきた、そのままでいいという揺らぐことのない存在肯定、実存的というのは存在のことだが、そういう実存するウェルビーイングの高さということが、これからの様々なところで言われると思う。ところが、その存在肯定がなかなかしてもらえない。例えば、朝、「おはよう」と声をかけること一つをとっても、登園したときによく来たねという「おはよう」、登校したときに「よう来たな」という「おはよう」と、単に機械的な「おはよう」とでは全然違う。そいいう存在肯定が今一度大事ではないかと思った次第である。どうしても日本人は他者との比較で子どもを褒めやすい。そうではなくて、子どもの声を代弁すると、僕の４月と僕の９月のこの６か月の違いだったら子どもは受け入れやすい。けれども山田くんと僕となってくると、「僕と山田くんは違うし」と思ってしまう。私達でも一緒だと思う。同じ業績でもあなたの下半期はこうだから３月末までにはこうしましょうと言われると受け止めやすいが、何々さんはこれだけできているのに、あ

	なたはどうだと言われるとつらい気持ちになる。それと一緒で同じ比較をするなら、その人の中の時間軸の方でする方が受け入れやすいと思い、比較の承認のことを資料に書かせてもらい用意をしてきた。皆さまのご意見を聞きながら、また折を見てお話していきたいと思う。 　では、委員の方から外国ルーツの子どもたちのことや多文化共生で、地域のお声として保護者の困っていることなどを教えていただけたらと思う。
委　員	ワールド・アミーゴクラブは、毎週土曜日の午前中の２時間、子どもたちの支援活動をしている。初めて来る子どもの場合は、親との話を特に大事にし、丁寧にしている。どういう経緯で日本に来ることになったのか、そして今後、日本でどうされたいのかというのをちゃんと知っておくことが、子どもの支援の上でとても大事だからである。例えば、以前多かったのは出稼ぎで、何年か経ったら国に帰るというのが、ブラジルとか南米系の方に多かったが、最近、アジア系の方の中には、自分は国にも家があるので帰るが、子どもたちには日本の高等教育を受けさせる方もいる。そういう話をしっかり聞いた上で、その子どものたちに支援ができることは何かと考えている。 　子どもたちは小学校、中学校に在籍しているので、プラスアルファの支援であるが、私たちの支援は親とよく話ができることである。最近わかったことだが、先に父親なり母親なりが日本で生活していて、日本の生活が安定し落ち着いてきてから、母国の祖父母に預けて向こうの学校に行かせている小学校５、６年生とか、あとは中学生の子どもを日本に呼び寄せることがある。それから就学年齢を超えて、母国での教育を受けさせてから日本に呼び寄せるケースもあるが、そういう子どもたちの話を聞くと、親は、自分の子どもたちが小学校、中学校なりでどういう教育を受けてきたか、どういう環境の中で育ってきたかという情報が全くわからない。つい最近のことだが、びっくりしたのは、小学校６年生で九九ができない子どもがいたことである。その子どもはフィリピンなのだが、フィリピンは、母国語プラス英語教育が学校教育の中で浸透してるので、習ってるはずの英語も一切できない。じゃあ、どうしてたのかと聞いたら、家に帰って、おじいちゃんおばあちゃんと生活してる中では英語環境が一切ないので、英語ができないという状況があり、６年生になって九九もできない。計算問題をさせると、全部棒を引っ張って出して、３×３だから３を３本引いたのを見つけて１，２，３，４，５，６，７，８，９と数えていくという計算をしている。その子は小学校６年生なので、来年、中学校になったときには、親は家を買って日本に定住するとのことなので、親には、その子どもの現状をしっかり話して、これからどのようにしていくのがいいのかという話をしている。 　あともう一つ、そういう保護者は、それまで子どもとのコミュニケーションが十分にそれまでに培われてこなかった分、これから新たなコミュニケーションをつくっていかなければならない。中には複雑な家庭環境もある。日本人男性と結婚した家庭、それから違う国籍の人と結婚した家庭、そう言う家庭では、共通言語が何なのかとかいうところまで把握しながら、できるアドバイスをしている。 　それから年齢が高い子にとって大変なのは、決して自分が来たくて日本に来たのではないというその気持ちをどうやって吐き出させるかである。今、日本の環境の中で、日本語が十分できない中で、その子は何ができるかというと、スマホで母国にいる友達と話をしたり、ゲームをしたりであり、そういうことでしか彼なり彼女なりの心の平静

	を保てない状況にある。一方で、日本で生まれた子どもたちは日本語がどんどん上達していく。しかし、親はお金を稼ぐために日本で生きているという思いがあって、日本人以上に仕事に一生懸命で、日本語ができなくてもできるラインワーカーの仕事についてる親は、日本語が十分にできないままであり、子どもだけが日本語が上達していく一方で母国語ができないという状況になってる。 　家庭の中で、先ほどから出ている「質」のあるコミュニケーションをしようにもその基本となる言葉がない。感情や気持ちを表す言葉はすごく大事なのだが　それを伝えるすべがない親とか子どもがいる状況の中で、「質」の高いコミュニケーションを高める土台にも乗れない家庭環境があるという思いを持っている。子どもたちには、日本語をしっかり身につけてほしいことと、それからやっぱり学力をしっかり保障してあげたいという思いを基本に、外で地域でできる支援をしている状況である。
会　長	子どもは置かれる環境によって多様な背景を背負うことになるし、その親もまた、様々なバックグラウンドのある中で日本で頑張っている状況がよくわかった。 　では、続いて園にお願いする。
委　員	今回のテーマについて、ひかり園の取り組みはどうかと考えていたが、園の中で、同じクラスの子どもと子どもが一緒に遊んでたらトラブルというのは普通に起こるけれど、その背後にあるお父さんお母さんにとっては、特にやられた方の保護者にとっては、一度だけであっても不安が強く心配も大きい。できるだけクラスを離してほしいとか、一緒に遊ばない配慮をしてほしいとかいう思いを伝えてこられる保護者もいる。そういう場合での園としての関わりを紹介させていただきたい。子供同士は遊びたいと思っているが、保護者は、また何かされるのではないかという心配が強いので、その子とは遊ぶな、違う子と遊びなさいと家では子どもに言う。子どもは親の言うことを聞かなければならないので、親子そろって面談をするときには、「それでいいの？」と担任が聞いても「うん、遊ばなくていい」と言う。しかし、できるだけ離してほしいという要望に沿ってそういう配慮をするが、しばらく経って子どもの様子を見ていると、やっぱり子ども同士は遊びたい。でも、遊んだらダメと言われている。気持ちの葛藤がある中で、先日、担任が「本当はどうなの？おうちでどんな話してるの？」ということを、少し時間を取って子どもと話をしてみたら、やっぱり遊びたい、でも家では言えない。これでは子どもはしんどいなと思った。やっぱり子どもの中にも、この人には自分の本心が言える、この人には心を開ける、自分の殻を作らなくてもいいというようなものが、年長児ぐらいになったらできてくると思い、それをどう保護者に伝えていくかが、私達の大きな業務の一つと思っている。 　先ほどの話ではないが、子どもにも自分のスピードというのがあって、今、話したいときとか、これを聞いてほしいというときに、親都合の時間のサイクルじゃなく、子どもサイクルの時間で保護者は聞いてあげてほしいということと、子どもが本心をちゃんと保護者に言えるような支援が、最近は課題になってきてると思っていた。 　職員同士もそうだし、子ども同士もそうだが、親子だから一番コミュニケーションが取れているというふうに思いがちだが、なかなかそうはいかないのが現状かなと思っている。

会　長	私は、子どもの自殺対策の最前線に関わっているが、、家庭的に外から見たら裕福で問題がないような家庭でも、子どもが孤独、孤立していて、この世に生きていたくないと思うような背景をひも解いていくと、質の問題や様々な孤独の問題がある。親としたら関わっているけれども、子どもにすれば先ほどの園児さんの声ではないけれども、子どもの本質のところがさらけ出せない関係性と、親の期待と子供の願いと、いろいろあるかなというのが、いろんな職種職業をしている中で感じ取れたことである。先ほどのお話でもあったと思うが、子どもは親に認めてもらいたいので親の期待通りに自分を合わせることによって、自分の思いを萎縮させている。それって本当に主体的なことなんだろうかと、今聞きながら思っていた次第である。子どもは友達関係の中で１８年間安心してもまれていく。いろんな人がいていろんな関係があって、その中で安心して園と学校の中で社会性を育んでいって、地域の中で育んでいってそして社会に出ていくというのが子どもの１８年間で、そういういろいろさせてもらえる土壌があるにも関わらず、親の心配でその接点すら大人みんなで配慮、配慮としていくと、ビニールハウスで育つみたいな状況になって、もうちょっとしたことでもポキッと折れる子どもたちがいっぱいいる。なので、親が、大人の問題の部分と子どもの問題の部分が一緒になってしまう場合、私は現場にスクールソーシャルワーカーの立場でもいるので、いろんな親が、自分が相手の親とか、相手との関係とか、子どものつらい思いをくみ取るのがしんどいとか、いろんなことで子どもの人間関係まで干渉が強くなってしまう背景には、親のそういった不安の高さがあるのではと聞いていて思っていた次第である。 では、これからは子どもや親子に間接的に関わっていただいている皆さまのお声をいただきたいと思う。まず、まちづくり協議会の委員からお願いする。
委　員	まちづくり協議会は８協議会が市内にはある。私は、かつて約４０数年間教育に関わっていたが、変わったなと思いながらいろいろ聞かせてもらっていた。 まち協の前に自治会やお寺の世話役などいろんなことをしているが、僕たちの世代もずいぶん変わってきた。自治会に入らない、お祭りに参加しない、墓じまいをする。僕たちの世代でこれだけ変わってきたら、今の子どもたちの世代ではどれだけ変わるのか不安を覚えている。僕は安土学区に住んでいるが、たぶん旧市内はもっと変わるだろうと思っている。 子どもに関わっているのはスクールガードで、「おはよう」と声をかけても何も言ってくれない子どもいれば、いつも一番に声をかけてくれる子どももいる。中学生だと思うが、「ガードのおじさんや」と声をかけてくれる子どももいて、ありがたいなと思っている。 かつて中学校に勤務していたので、今、教え子の相談に乗っている。その教え子はとても優しく理解のある父親だが、優しすぎないか、叱ることも必要ではないかという話をしている。母親は夕食をつくってから自分の趣味のために外出している。子どもは理解していると言うが、本当に理解してるいのか、本当は母親に家にいてほしいと思っているが、ずっと我慢しているだけではないのか、優しさとは何か、「いいよ、いいよ」ということだけが優しいのか、このままではこの家は崩壊するのではないかという思いをもって相談に乗っている最中である。先ほど委員がおっしゃっていた、一緒にお風呂に入ることで自分の思いを漏らすことができる、そんな場所が必要ではないか

	と考える。大人も自分の時間が必要だし、確かに家族のことばかりだけでなく、いろんなことを考えていかなければならない。連れ合いと共有することも大事なことである。私は、今は連れ合いと二人きりで会話もあまりもないが、昨日、久しぶりに会話をして３時間ぐらい論議した。それが新鮮で会話もすごく大事だとあらためて思った。今夜も地域の会議がある。最初に言ったように地域が変わり、考え方が変わりつつある中で会議に出るのはつらいなと思った次第である。
会　長	今日は行政の方もたくさんいらっしゃるので、子どもに一番近い学校教育課から順番にお願いしたい。
委　員	先ほど生涯学習課の方から出たアンケートと関連するところでは、今年の学力学習状況調査で、６年生を対象に家庭でのコミュニケーションに関わる質問を分けて聞いている。学習に関することでは、週に1回以上おうちの人と話をしますかという質問に対して小学校は７６％、中学校は６９％で、生涯学習課の数値とそこまで変わらないが、困っていることについておうちの人に話をしますかという質問になると、小学校が３４％、中学校が３５％という数字になる。全国の数字とはそこまで差がないので、近江八幡市だけではないのかもしれないが、子どもは、困っていることについて、あまりおうちの人とは話をしないという状況であった。 学校現場の方では、子どもの学習活動に対して保護者の方にいかに関わってもらうかが大事である考えている。小さなところでは、小学校は、国語で音読をおうちの人に聞いてもらう、リコーダーの練習をおうちの人に聞いてもらいチェックをしてもらう。おうちの人にコメントをもらってくることを宿題にする場合では、小中学校の家庭科の調理実習や洗濯に関わる学習時に、おうちの方は洗濯でどんな苦労しているかとか、どんな工夫をしているかとか、お味噌汁を作るのに家庭なりの工夫や隠し味とを聞いてくる取り組みなどしている。ただ、これも１０年ほど前から少し変わってきていて、洗濯の工夫や調理の工夫などをおうちの人はしていないとか、おじいちゃん、おばあちゃんに聞いてきたような答えが返ってくるとかが見られるようになった。自分が晩ご飯を作っているというヤングケアラーに関わるようなこともある。 また、小学２年生でこれまでの生活を振り返る学習とか、４年生で２分の１成人式とか、６年生で卒業やキャリアに向けての学習をしているし、中学校でも職場体験などのキャリア学習で、おうちの方へインタビューしたり、自分の小さい頃について聞いてみようという学習をしたりしている。ところが、自分の昔のことがわかる資料や写真があまり残っていなかったり、小さい頃のことを聞いても、おうちの人からあまり話が出てこなかったりがあり、学校も慎重に進めなければならなくなっている。 あと、中学校では定期テストの結果を返すときに、おうちの人からコメントをもらってくることで、子どもの状況を知ってもらう取り組みをしている。先ほどもあったスマホの使用時間では、１日２時間以上使っているのが小学校で６０％、中学校で８３％という結果が学力学習状況調査であり、県や全国の平均を上回っている状況である。学校現場でもスマホの使用時間は問題になってきていたが、その使用の中身についても子どもたちやおうちの方には、問題としてとらえてほしいと考えている。実際に子どもたちのスマホ使用の低年齢化によってトラブルも低年齢化してきている。主なところではLINEやTikTok

	やインスタグラム等がある。今はフォートナイトというゲームの流行が長時間利用につながっている。日本では推奨年齢が１３歳なので小学生は本来使えないはずだが、そのLINEでトラブルが起きたり、インスタグラムにあげたり、TikTokで撮影したりすることで起きるトラブルが、小学校から当然のように上がってきている。子どもが使っているものについて、おうちの人はどのように認識されてるのかというのを学校現場にいたときによく感じていた。おうちの人が子どもとコミュニケーションを取ったりする時間がなく、スマホに委ねてしまってるところがあるのかなととらえている。
委　員	健康推進課は、保健師の訪問や妊娠期から教室を開催するなどの様々な取り組みをしている。コミュニケーションに関しては、まず妊娠の場面では夫婦で来ていただく教室を開催し、夫婦のコミュニケーションをしっかり取っていきましょうというワークをしてもらっている。奥さんがこんなこと考えてたんだとか、ご主人がこんなこと思ってたんだとか、家ではこんなことは喋ったことがなかったという声もあり、子どもがいない段階でも、夫婦ともお仕事をされてると喋る時間がないんだなというのが現状である。 あとは、１歳８か月児健診や２歳６か月児相談の場面で、どうやって褒めるのかがわからないという声もある。「こんなことできたね」と言って一緒に子どもと喜んだり、「すごいやん」という言葉がけをしたりするだけでもいいと思うが、それがどう言えばいいわからない。 あと、保護者は仕事をされているので、例えば、健診で子どもの発達が少しゆっくりと感じられるときには、数年前までならおうちの方に訪問させていただき、家での様子を聞かせてもらったりすることができたが、今は、出産後は子どもが１歳になったら園に入っていることが多く、訪問させてくださいと言っても仕事で家にいない。それなら園の方に寄せてもらってお子さんの様子を聞かせてもらいますということになる。電話でどうですかと尋ねるだけになり、なかなか保護者と出会えない、コミュニケーションが取れないのが現状である。ただ、保護者も忙しく、バタバタと１日過ごす中で、頑張って子育てされているのが実際に見て取れるところである。 健康推進課ができることは、個別で出会える健診の場面で、しっかりと保護者と向き合い、しっかりとコミュニケーショを取っていくことである。課としてそれを大事にしていきたと考えている。 あとは、夫婦の会話、コミュニケーションについても、普段から夫婦で喋っておくことなどを、場面、場面で伝えていけるようにしていきたいと考えている。
谷口委員	３歳未満の子育て世帯が利用される直営の子育て支援センターが２館と児童館機能を備えた子どもセンター３館を直営で管理をしている。コミュニケーションの話でいうと、センターに連れてきても子どもと遊ぼうとしない親がおられ、子どもを見ずにスマホを見ている、他の親とも交流しない、スタッフが子どもに関わるように促しても、なぜ、そんなことを言われるのわからないとうい反応であると、月１回のセンター長との情報交換で最近よく言われる。もちろん全ての親がそういうわけではないが、スタッフがそのような親に注意や声かけをしても、別に嫌がることなくまた来館する。で、また同じような状況の繰り返しで、どう関わっていけばいいのかと苦慮するという状況が出てきている。当課としできることは、前回も少しお話させていた

	だいたかもしれないが、第１子が生まれた親を対象に、親子の絆づくりプログラムを毎月、全４回シリーズで実施している。これを継続させていくことで、親子のコミュニケーション、また家庭内のコミュニケーションの充実ために今後も頑張っていきたいと考えている。
委　員	幼児課では窓口での子育ての相談や電話が主で、いつも関わっている保護者ではないため、よく様子を聞いて相談に乗るということを行っている。窓口の様子では、話をしている時に、一緒にいる子どもがおとなしいのでなぜかと思うと、子どもの前にスマホを置いてYouTube を見せている場面も見られる。今はそういう時代なんだと感じている。 私は保育所での経験が長い。生まれたときから泣いても声をかけてもらえなかったりする状況が繰り返されると泣いている子は次第に泣かなくなって何も言わなくなる。親とすれば泣かないし育てやすい子だと思ってしまうが、泣いても伝わらないので言わないというように育ってきている子もいると感じている。ゼロ歳で入ってくる子どももたくさんいる中、泣いて保育者を求める子どももいれば、泣かない子どももいる。こどもが泣いたとき（自分の思いを出した時）に、「どうしたの」と声をかけると、泣いていいんだ、聞いてもらえるんだと子どもは思い、そこで初めて子どもと心が通じるというところを見ていると、生まれたときからのコミュニケーションが本当に大事だなと思う。一言泣いただけで、子どもにどうしたのと声をかけるのが大切で、ゼロ歳から来ている子どもたちには保育者の関わりがすごく大事で、１歳２歳３歳４歳５歳になっても、やっぱり先生たちのこの関わりがすごく大事だと園にいるときに感じていた。一度、５歳児のお昼寝の時間に、「僕なっ」と自分の気持ちを伝えてくれた時、この子は保護者に言えなかったことを私たちに言ってくれたというその気持ちが嬉しかった。おうちの人に伝えてもいいかと聞くと、「いい」と言ったので伝えさせてもらった。就学前の子どもとのコミュニケーションの大事さに保護者にも気づいてもらうこの取り組みは大事だと思う。一方で保護者の忙しさもよくわかる。朝の７時に園に送り夜の７時に迎えに行って帰ったらご飯食べさせてお風呂に入れて寝かせてとすごく忙しい。その姿も認めたうえで、子どもが「聞いてっ」と言ったときは聞いてあげてほしいということを伝えていく。子どもが大人になっていくと、これが大事なことにつながっていくことを就学前の間に伝えていきたいと思っている。
委　員	生活保護としては、家庭内のコミュニケーションに課題がある世帯に対して、生活保護のケースワーカーは、生活費の支給だけでなく、世帯全体の生活の安定と自立を支える支援者として、課題の背景をアセスメントして、専門機関と連携しながら、関係修復と環境調整を行う必要があると考えている。 取り組みは二つあり、一つ目は課題の背景分析で、家族が同席している場ではなかなか本音が話せないと思うので、家庭訪問や福祉事務所での面接において、一人ひとり、個別に話せる機会を作りたいと考えている。そして、コミュニケーション不全の原因が、経済的困窮によるストレスなのか、精神疾患や知的障害、発達障害によるものか、あるいは、DV や虐待、不登校、ひきこもり、ヤングケアラーなどの問題が隠れているかを分析したいと思っている。 また、家庭訪問の際に、家族間で感情的なぶつかり合いが起きた場合は、第三者として、中立的な立場で、それぞれの言い分を聞いて、お

	互いの考えを通訳するような形で仲介したいと思っている。 　二つ目は、外部の関係機関との連携で、ケースワーカーだけで家庭内のすべての問題を解決するのは難しいので、専門機関につなぎ、チームで支援したいと思っている。例えば、メンタルヘルスの問題がある場合は、精神科への受診につなげ、医師や精神保健福祉士、保健師との連携を行う。子どもが関係している場合は、本市の子ども家庭センターや児童相談所、学校、保育所等と情報共有し、子どもの安全と健全育成を支援する。虐待やＤＶがある場合は、被害者の安全を確保するため、子ども家庭相談センターの女性保護担当等と連携して、保護施設への一時保護を行い、施設の支援員等とも連携して自立に向けた支援を行う。また、家族間の関係悪化が深刻で、同じ空間にいること自体が精神的に悪影響で、自立を阻害すると判断される場合は、世帯分離による転居を検討し、生活保護のほうで転居費用を支給する。子どもが将来の進学に向けた意識などの面で課題を抱えていたり、世帯が周囲や地域とのかかわりが少なく、必要な情報や支援が届きにくいという課題がある場合は、福祉暮らし仕事相談室が子育て支援課と連携して、子どもの生活・学習支援事業を実施しているので、そちらの事業への参加を案内していく。内容は、学習習慣の定着、基礎学力の向上、基本的な生活習慣の習得、保護者に対する養育支援、相談支援、食事の提供等である。こういう取り組みをしながら、家庭内のコミュニケーションを支えていきたいと思っている。
会　長	本日は、皆さまに大変熱心にご協議いただいた。 議事の方が終了したので事務局の方に返したいと思う。 ５　諸連絡 ・近江八幡市子育てサロンについて 第２回は 10 月６日（火）「子どもの食と生活リズム」 第３回は 11 月７日（土）「子どもの SOS（仮）」 ・第３回家庭教育推進協議会 １１月１３日（金）10:00～11:30　近江八幡市役所 ４階　委員会室３ ６　閉会挨拶 副会長 ７　閉会